

博士学位論文「尾崎翠における詩と病理についての研究」
京都府立大学大学院文学研究科国文学中国文学専攻博士後期課程
二〇一三（平成二十五）年研究指導・単位取得認定退学
二〇一四（平成二十六）年三月二十四日 学位授与
石原深予

要約（4000字程度）

本論文は「論文編」「資料編」の二部から成る。まず「論文編」では「第七官界彷徨」（1931）をはじめとする尾崎翠（1896-1971）の代表作を「詩と病理」という観点から論じた。「資料編」には「新たに確認できた尾崎翠自身による書簡・作品」を収録、「新たに確認できた同時代評および同時代人との関係を示す資料」を紹介し、解説を付した。この要約では「資料編」の内容は省略する。

第一章では「第七官界彷徨」という作品名にも含まれる「第七官」という語の明治期から昭和初期における語誌を辿り、尾崎が接したと考えられる用例を推定した。また語誌を辿りつつ尾崎の宗教的・思想的背景を紹介した。従来「第七官」という語は尾崎の造語とされてきたが、管見の限りでは、この語は明治期から大正期にかけて骨相学や仏教の文脈でしばしば用いられ、また民間精神療法等の文脈でも用いられていた。この語の明治期から大正期の用例は、近代科学が制度として確立していく時期において「科学」ではないとされていくもの、そして日本あるいは東洋と西洋とを融合させようとする発想やメタフィジカル宗教に親和性があった。続いて大正末期から昭和初期には前衛芸術家の鋭敏な感覚を表す文脈や、岡本一平の漫文やベストセラーの占い本をはじめ大衆的・通俗的な文脈でも用いられた。昭和に入ると「第七官」という表記はほぼ無くなり、「第七感」と「感」の字を用いた例が多い。昭和初期における「第七感」という語には、明治期から大正期にかけての用例における精神性の高みを目指した雰囲気や、人類に新しい感覚が芽生えるのではないかという期待は、すでに無くなっていたと考えられる。なお「第七官界彷徨」における「第七官」という語には進化論的発想が見られることから、骨相学等の影響が考えられる。また文字と「第七官」とが関わる発想等から橋本五作『岡田式静坐の力』等の影響も考えられる。

第二章では「第七官界彷徨」を論じた。この作品は語り手が「よほど遠い過去のこと」と自らの過去を回想して語る物語である。物語内で「第七官」という語は「喪失」やそこからたちおこる「哀感」に関わっていた。なお語り手は「人間の第七官にひびくやうな詩」を書こうという目的を果たせなかったようであるが、それが書けた時にしてみたであろう「こころこまやかな」やりとりは、隣人との手紙のやりとりという形で体験していた。その隣人との別れという最も悲しかったであろう出来事について語り手は沈黙していた。次に、物語に登場する事物や第一章を踏まえた「第七官」という語の意味や表記の変遷から、「よほど遠い過去のこと」と回想される物語内時間がいつであるかを推定すると、大正後期、関東大震災の前年と考えられる。ではこの物語内時間の後、登場人物たちは被災して亡くなり、物語で描かれた東京の風景も無くなった可能性がある。「第七官界彷徨」が発表された昭和6（1931）年から考えて大正後期は「よほど遠い過去」ではないが、こ

の物語が震災による時代の大きな変化を経た語り手の回想であるならば、それを「よほど遠い過去」と語り手が感じることは肯われ、時代の変化や死者への思いに沈黙する語り手の悲しみは深い。このような語り手の姿は、回想される過去の世界において語り手が「喪失」や「哀感」について思いをめぐらし、隣人との別れという悲しみに沈黙していた姿に重なり合う。最後に、「第七官界彷徨」という作品名からは二つの意味が読み取れる。一つは語り手が回想する震災以前の過去の幸福な世界、私的体験について、もう一つは語り手が「語る現在」の時点で体験している震災以前の過去との断絶、語り手が他者と共有する歴史的経験についてである。二つの意味が重なったノスタルジアの心性が「第七官界彷徨」という題に象徴的に表現され、その心性は同時代性を有し、「第七官界彷徨」という作品名にはそのような同時代性も刻印されていたと考えられる。

第三章では「歩行」(1931)を論じた。まず冒頭と末尾にほぼ同じ詩が置かれることから円環構造とされてきた作品構造を検討し、この作品は直線構造として読むことができることを論じた。また「おもかげ」という語が用いられた古典和歌や『伊勢物語』等がこの作品の冒頭・末尾の詩の典拠として考えられることや、この作品において内側が「空」である「芭蕉の幹」と語り手「私」のイメージが重なり、ここにも古典和歌が典拠として考えられることを指摘した。作品には、いなくなった人の「おもかげ」に心をとらわれ、喪失感にかかわって生起する「かなしみ」や「くるしみ」のために「神経」が疲れている人物が、「おもかげ」を一刻であっても忘れることができる場合が描かれた。また発声せずとも思いを文字で書きあらわし、文字を読んで音声イメージを再現することによって、「口」や「耳」の辺りの「淋しさ」がなぐさめられたと考えられること、そして悲嘆や苦渋な状況に適格である「詩」が、それを癒やす可能性が描かれたことを論じた。

第四章では「こほろぎ嬢」(1932)を論じた。この作品の語り手「私たち」は、曖昧な情報に影響されながら「神経病」に罹っているという主人公のこほろぎ嬢(以下「嬢」と略述する)や嬢の飲む粉薬について否定的な解釈を有する。さらに「私たち」は嬢の「神経病」の原因を粉薬とすることで嬢をかばいながら、「神経病」が内包している新たな芸術や思想等の展開という嬢の志向したことを阻む可能性を有する。これは嬢の母親と共通する心性と考えられる。次に先行作品からの影響として北原白秋歌集『桐の花』や『新古今和歌集』所収のきりぎりす詠などを指摘した。桐の花と嬢とは「神経病」に罹っている「同族」と語られるが、「霧」という「桐」の同音を介して嬢が憧れる女詩人「まくろおど」も二者の上に重なり合う。また嬢は異国の神秘的な詩人「しやあぶ・まくろおど」の恋物語に心惹かれるが、この恋物語への『伊勢物語』や「火星」に関する先行作品の影響、七夕伝説との類似を指摘した。晩春の物語であるこの作品において、嬢や「しやあぶ・まくろおど」に「こほろぎ」「七夕」という季節外れのイメージが付与されていることは、彼女らの孤独や「神経病」と評されることを象徴していよう。嬢は自らの好みや望みを「神経病」や「冒涇」とする他者の価値観に影響され、それを罰するかのような「頭を打たれる」という痛みを心身に感受するほど弱っている。嬢は粉薬とパンの摂取によって痛みから回復するが、それは本質的な回復ではなく、嬢はなお被害妄想を有している。嬢から「まくろおど」への問いかけは、「頭を打たれる」感覚が粉薬とパンの摂取によって麻痺された上で表出した言葉である。その言葉には嬢の「肉身を備へ」て存在することへの違和感が見られ、嬢の内奥には世界に対する反逆心が存在している。ただし正統とされるものへの反逆

とは両義的であり、そこには新しい世界が展開する可能性も胚胎している。嬢は読みたかったであろう「しやあふ・まくろおど」の詩を見つけられなかったが、それが読めていれば嬢は一刻の安らぎを得られた可能性がある。「歩行」の末尾と対照的に、神経の疲れた人物を癒やすのに適格な詩が現れなかった場合が「こほろぎ嬢」では描かれた。「こほろぎ嬢」末尾の「夕方」の場面では、「しやあふ・まくろおど」の「人の世のあらゆる恋仲にも増して、こころこまやか」であった関係と対照的な、嬢の索漠とした孤独が際立っている。

第五章では「地下室アントンの一夜」（1932）を論じた。まず尾崎のロシア文学への関心を概観した上で尾崎がロシア文学の中でもとくにチェーホフに惹かれていたことを指摘し、チェーホフ「決闘」とエヴレイノフ「心の劇場」が「地下室アントンの一夜」に影響した可能性を指摘した。次に作品の大部分を占める「（土田九作詩稿「天上、地上、地下」についてより）」（以下「詩稿」と略述）において、語り手「僕」に統合失調症の陽性症状が現れていると考えられることを論じた。「僕」は自己破壊へ向かおうとする危機的状況にあったが、二人の治療者像を内界に得たことにより自己破壊を回避し、「地下室アントン」へ向かう。治療者像が現れる「地下室アントン」という場所は、詩人土田九作の内界にある治療的・保護的なうつわであると考えられる。九作はここで一刻の安らぎを得て自己の回復を治療者像の並置によって想像する。しかし土田九作という詩人のたましいは「わたし自身はなっていない」と深く自覚している。九作の回復に必要と考えられる肯定的な女性像は「地下室アントン」に現れないが、九作はそのことを忘れて爽やかでいられるような、感覚が麻痺しているような状態にある。九作の回復が一時的である原因がここに象徴的に表れている。しかしながら「詩稿」における「僕」は、詩人としての尊厳を賭して自身の詩への批判に対して力強く反論していた。また「地下室アントン」へ向かう途上で「外の風に吹かれて、とても愉快」という体験をした。これらはすこやかさや回復の可能性と繋がっている。その可能性は九作が自ら詩を書くことでひらいたものである。この作品の最後のせりふ「さうとは限らないね。此処は地下室アントン。その爽やかな一夜なんだ」は、この一夜の回復が一時的であるということを示す冷徹な認識である。しかしそこには回復の可能性があらわれている。

最後に終章で随想「もくれん」（1934）を論じた。「こほろぎ嬢」「地下室アントンの一夜」においては聴覚の異常や肯定的な女詩人像が現れないことが病の表象として描かれたが、「もくれん」ではそれらが回復しており、他者や外界と「こころこまやかな」やりとりをする語り手の心身のすこやかさが描かれている。